Relax, it’s just a cognitive grammar thing
使用基盤モデルから考えるイントネーション知識の姿

平沢慎也

英語のイントネーションパターンの 1 つに、高い（非）ストレス音節から唐突に低いストレス音節に移行し、以降平坦を保つというものがある。以下の(1)(2)の下線部はそのように発音されている（図(1)(2)参照）。

(1) ［状況説明］自分の遊びや仕事に夢中である父親 Mickey は娘 Lily のことを全然構ってやっていない（ほとんど育児放棄）。以下は Mickey が Lily を連れて来ている競馬場でのやりとり。
Mickey: When is your birthday?
Lily: <u>Today</u>. (*How I Met Your Mother*, Season 8, Episode 3)

(2) ［状況説明］George がカフェを出ると友人の Jerry とばったり会い、中に入ろうと誘われる。George は再入店は恥ずかしいと騒ぎ出す。
George: I was just in there. It’s embarrassing.
Jerry: Oh, who’s going to know?
George: They all saw me walk out.
Jerry: <u>Two minutes</u>. (*Seinfeld*, Season 2, Episode 5)

このイントネーションには意味が結びついている。例えば(1)の Today.を実際の発音とは違って「低い[tə]→高い[de]→下降調で[eɪ]」と発音した場合、喜び・興奮の表出という解釈が可能になる。これに対して(1)の Today.の実際の発音は「親が子どもの誕生日を忘れるなんて」などの呆れの表出として解釈される。認知文法の立場からは、こうしたイントネーションについてどのように考えることになるだろうか。

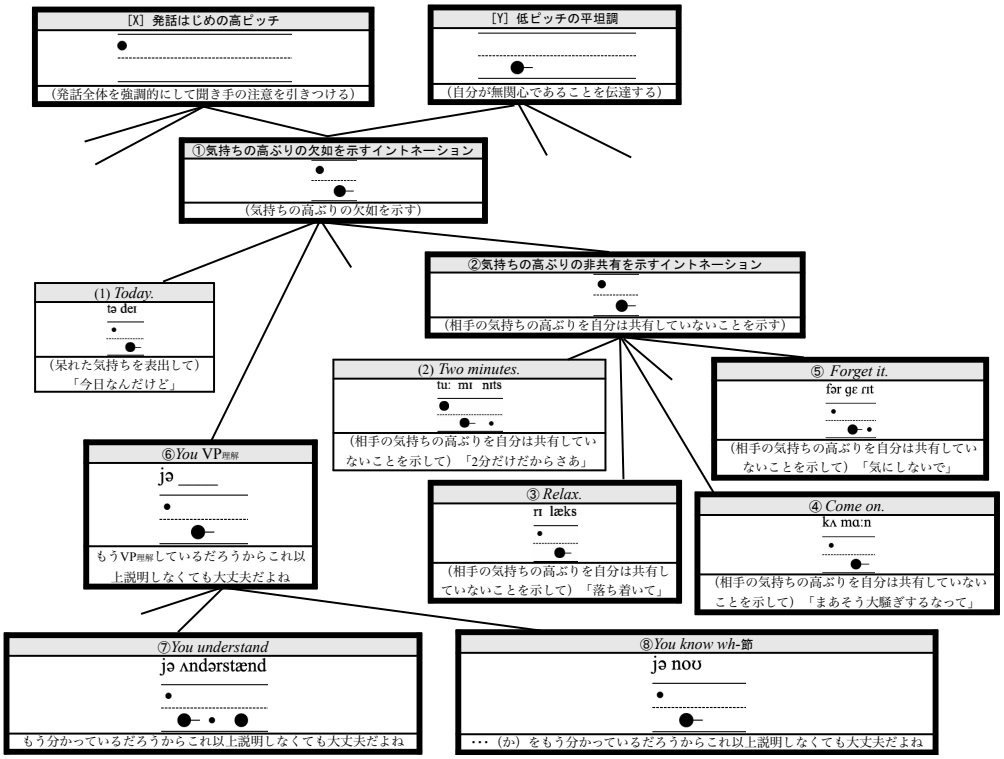

図　想定可能なイントネーション知識のネットワーク

認知文法では、言語の知識は実際の言語使用のディテールを（不完全ながら）記憶していき、その記憶同士の共通性つまり**スキーマ**を発見・抽出することによって得られる、と考える（Langacker 1987, 2008 など）。そのように抽出される言語の知識は**音韻極**と**意味極**からなり、音韻極にはイントネーションが含まれる（Langacker 2001; 2014: 38; 2016）。ということは、イントネーションの知識も実際の言語使用からの共通性の抽出によって得られるということである。例えば Relax.という発話は、慌てたり興奮したりしている相手に対してその気持ちの高ぶりをこちらは共有していないということを示す場合に、以下の(3)のようにこのピッチ変動を伴うかたちで用いられることがよくあり、母語話者はこうした実例に何度も触れながら、複数の実例の共通項として図の③のスキーマを抽出すると考えられる。

(3) David: Elizabeth! No, no, no, no, no.

Elizabeth: Relax. （映画 *Just Like Heaven*）

さらに、③を身につけた話者が(2)の実例にも触れた場合、(2)と③の共通項として図の②のスキーマを抽出すると考えられる。加えて(1)の実例に触れた場合、(1)と②の共通項として図の①のスキーマを抽出する。

スキーマは、その事例に出会った頻度が高くなると脳内で**定着**の度合いを増し，以後の言語使用において**アクセス・参照**されやすい知識になっていく（Langacker 2017）。先述の通り Relax.が当該のピッチ変動で発音される頻度は高いので、③のスキーマは相当程度定着しているだろう。図ではこのことが太枠により表現されている。Relax.の他、Come on.の諸用法のうち〈何かに関して騒ぎ立てている相手などをたしなめる用法〉や、Forget it.の諸用法のうち〈ある事柄にこだわるのをやめることを促す用法〉に関しても同様である（図④⑤）。③④⑤が脳内に定着していくと、それを通じて②や①も脳内に定着していく。

Two minutes.をこのピッチ変動で発音することは低頻度（図(2)の細枠）であるのに対して、Relax.と Come on.と Forget it の場合には高頻度である（図③④⑤の太枠）。この**頻度の偏り**は上位スキーマ②の習得を助けている可能性がある。というのも、これらの表現はピッチ変動の種類によらず（ある種の用語法では「語彙的」に）気持ちの高まりの非共有を表す傾向があるため、②のピッチ変動と一緒に用いられる頻度が高いと、話者は「②のピッチ変動もまた気持ちの高まりの非共有を表すのだろう」と思いやすいはずだからだ。

認知文法では、定着している知識のうち具体性の高いスキーマの方が抽象度の高いスキーマよりも実際の言語使用においてアクセス・参照されやすいと考える（Langacker 1987: 11.2; Langacker 2009）。例えば Relax.に 10 回触れたことで③を習得した話者が 11 回目に Relax.を発話するとき、直接的に参照する知識は（①②ではなく）③だろう。また、加齢で高音が出なくなってきた歌手が “I’m not good anymore. I’m not a singer anymore!” と騒いでいるのに対して，当該のピッチ変動で “You still are.” と発話することによって，気持ちの高ぶりの非共有を伝達した場合には，直接参照した知識は（①ではなく）②だろう。

認知文法では、**合成性**の高いパターンであっても丸ごと記憶されアクセスされることは、頻度が高いパターンであれば特に、ごく自然なことであると想定されている（Langacker 2000: 5.1）。本発表の①も合成性はかなり高いと言えるだろう。まずは気持ちの高ぶりと生理学的に結びついた高ピッチ部分を利用して、強調的な印象（O’Connor and Arnold 1973: 36; Liberman 1979: 108）、重要なことをこれから述べるという印象を与え、聞き手の注意を引き付けたうえで（Bolinger 1986: 184）、気持ちの高ぶりの欠如と生理学的に結びついている低ピッチの平坦部分を利用して、無関心をあらわにしているのだ（Jassem 1952: 71）と考えれば、①の意味極は概ね説明できたに等しい。しかし、このようにパーツに分解できるからといって①全体を話者が記憶していないということにはならない。認知文法に沿って分析するならば、話者の脳内において①の上位に図の[X]と[Y]が記憶されており、その意味でパーツ分解的な理解も可能である一方で、より具体性の高い複合的な①の方がアクセスされやすい知識だと考えることになる。パーツ分解型の説明と全体記憶型の説明の片方を取ったら片方を捨てなければならないとする発想——イントネーション研究における**「tune か tone か」論争**の背後にある発想——は、Langacker (1987: 28) の言う**排他の誤謬**である。

認知文法は**多義**を積極的に受け入れる。イントネーションに関しても同じ姿勢を取ることになる。例えば図⑥［*You* VP $_{理解}$］は、相手に説明をせねばと気張っている状態をある種の気持ちの高ぶりと捉えるならば①の下位スキーマとして位置付けられるが、⑦⑧などの例に触れたことがなく⑥を身に着けていない人が、⑥のパターンが英語にはあるはずだと①から自力で予測することは不可能だろう。母語話者は①の意味極に加え⑥の意味極もまた知っているのだ。認知文法にとってこのような結論は敗北宣言を意味しない。認知文法は多義を言語にとって自然かつ本質的な現象とみなしているからである（Langacker 2000: 5.2; 2006; 2022）。

参考文献：**Bolinger, D. (1986)** *Intonation and its parts: Melody in spoken English*. Stanford: Stanford University Press./**Jassem, W. (1952)**. *Intonation of conversational English*. Wrocław: Wrocław-skiego Towarzystwa Naukowego./**Ladd, D. R. (1978)** Stylized intonation. *Language* 54: 517–40./**Langacker, R. W. (1987)** *Foundations of cognitive grammar*, vol.1*: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press./**(2000)** A dynamic usage-based model. In: Barlow, M. and Kemmer, S. (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford, CA: CSLI Publications./**(2001)** Discourse in cognitive grammar. *Cognitive linguistics* 12(2): 143–188./**(2006)** On the continuous debate about discreteness. *Cognitive linguistics* 17(1): 107–151./**(2008)** *Cognitive grammar: A basic introduction*. Oxford: Oxford University Press./**(2009)** A dynamic view of usage and language acquisition. *Cognitive linguistics* 20(3): 627–640./**(2014)** Subordination in a dynamic account of grammar. In: Visapää, L., Kalliokoski, J., and Sorva, H.(eds.), *Contexts of subordination: Cognitive, typological and discourse perspectives*, 17–72. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins./**(2016)** Toward an integrated view of structure, processing, and discourse. In: Drożdż, G. (ed.), *Studies in lexicogrammar: Theory and applications*, 23–53. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins./**(2017)** Entrenchment in cognitive grammar. Hans-Jörg Schmid (ed.), *Entrenchment and the psychology of language learning: How we reorganize and adapt linguistic knowledge*, 39–56. Berlin: De Gruyter Mouton./**(2022)** What could be more fundamental? In: Krawczak, K., Lewandowska-Tomaszczyk, B. and Grygiel, M. (eds.) *Analogy and contrast in language: Perspectives from cognitive linguistics*, 15–46. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins./**Liberman, M. (1979)** *The intonational system of English*. New York & London: Garland./**O’Connor, J. D. and G. F. Arnold (1973)** *Intonation of colloquial English: A practical handbook*, 2nd ed. London: Longman.